

宮崎県における甘しょの生産振興

宮崎県総合農業試験場
畑作園芸支場 河野健次郎

1. 宮崎県における甘しょ生産の概要

(1) 甘しょ生産の歴史

宮崎県の甘しょ栽培の歴史は江戸時代までさかのぼる。救荒作物として栽培が広まり、明治時代には8,200haが作付され、「三葉」、「唐戸」、「壺屋」の3品種が栽培されている。また、明治34年には10数種の品種比較が行われた記録もある。昭和19年には「蔓無し源氏」、「花魁」、「アメリカ」、「農林2号」を奨励品種にしており、県内各地で栽培され、食用、切干、蒸し切干し、諸飴、諸団子、焼酎、でん粉、酢、家畜の飼料と多岐にわたって利用された。昭和25年頃より「高系14号」が導入され、早掘りを中心に栽培が拡大した。その後、「高系14号」からの選抜系統で、昭和48年に「ことぶき1号」、57年には早出し用に「宮崎紅」を推進し現在に至っている。

(2) 甘しょ生産の現状と位置づけ

宮崎県内の甘しょの生産は、県西部及び県中南部の畑地帯を中心に平成19年産で約3000haが作付されている。青果用と加工用（アルコール用、でんぷん原料用、その他加工用）に分けられ、青果用は約1,000ha栽培されている。青果用の面積は減少傾向にあるものの30億円以上の産出額で、県南の串間市は全国でも有数の産地となっている。

表-1 甘しょの用途別生産状況の推移

(単位：ha)

年次	青果用	加工用			合計
		アルコール用	でんぷん原料用	その他加工用	
14年産	1,139	350	48	563	2,100
15年産	1,111	470	43	476	2,100
16年産	1,104	816	70	270	2,260
17年産	1,200	898	81	251	2,430
18年産	1,150	1,340	78	302	2,870
19年産	1,025	1,700	71	204	3,000

資料：宮崎県農産園芸課調べ

る。

また加工用については焼酎の需要拡大にともない、アルコール用が大幅に増加しているが、その他加工（色素原料）用については減少傾向である。

2. 青果用甘しょ生産上の課題と研究対応の状況

(1) 生産振興組織との連携

宮崎県では園芸品目の生産振興を図るため、宮崎県園芸振興協議会を設立し、技術的な課題については、当協議会を中心に、行政、団体、研究等が連携し、様々な技術課題に取り組んでいる。

(2) 周年出荷に向けた栽培方法、貯蔵技術の開発

昭和37年頃より青果用の早掘栽培が推進されるようになり、昭和43年からマルチ栽培が普及した。その後、早掘栽培の作付けが更に増加し、出荷時期を更に早めるためにトンネル早熟栽培が行われるようになった。

また、出荷期間拡大のために生産者毎に貯蔵庫（横穴式）が設置され、貯蔵技術が開発された。近年では納屋を改造した倉庫タイプのものも導入され、これにより、周年出荷が可能となり甘しょ専作の農家が増加した。

(3) 病虫害防除技術の開発

紫紋羽病やセンチュウ、コガネムシの食害による被害が見られる他、昭和49年頃より立ち枯れ病が多発するようになり、クロールピクリン等による土壌病虫害に対する消毒技術が開発された。

昭和50年代に入って、いもの皮色が退色し帯状に縞が入る帯状粗皮症による品質低下が問題となったが、アブラムシが媒介するウイルスによるものであることを究明し、茎頂培養によるウイルスフリー化によって解決できることを明らかにした。

(4) 大量育苗技術の開発

病害対策としてウイルスフリー苗が普及し、皮

色向上の効果も確認され急速に拡大した。塊根を経過せず苗で増殖するとウイルスフリー効果が持続することが確認された。現地においては平成5年から養液栽培施設が新たに導入され、苗の大量増殖技術が開発された。

(5) 継代培養による変異への対応

ウイルスフリー苗が定着し、継代培養を繰り返すうちに変異が生じ、これまでに2回、親株の更新を行っている。現在の親株は平成14年から優良株を29か所から収集し、選抜したもので、平成20年度より供給を開始している。

3. 甘しょの品種・種苗供給の現状

宮崎県の青果用甘しょの主力品種は「高系14号」から選抜した「宮崎紅」である。現在の種苗供給体制は、県が带状粗皮対策として昭和57年に宮崎県食用かんしょ採種協議会を発足させたことに始まり、翌58年から茎頂培養によるウイルスフリー苗の配布が開始している。昭和61年から「紅ことぶき」が出荷され、利用も増加した。昭和63年には野菜、花き、いも類、果樹の無病苗大量増殖と優良種苗の安定供給を推進するため、県、市町村、JAの出資により(社)宮崎県バイオテクノロジー種苗増殖センターが設立され、翌年から種苗供給がスタートしている。

現在は宮崎県総合農業試験場畑作園芸支場で親

株の選抜を行い、同場生物工学部で茎頂培養、ウイルスフリー化の確認を行い、(社)宮崎県バイオテクノロジー種苗増殖センターで増殖し、各JA等に苗を供給、JAの網室で二次増殖を行い、各生産者へ供給する体制としている。

4. 甘しょ生産の今後と振興上の課題、対応

宮崎県内の青果用甘しょは、ピーク時50億円を超える産出額であったが、近年は作付面積、産出額ともに減少してきており、産地では収量性の向上や低コスト化を追求する動きが更に強まっている。品種は「宮崎紅」を主体に生産が行われてきたが、高糖系の新品種(「べにはるか」等)の知名度も高まっており、特定の品種を大量生産し全国に流通させる販売方法加え、加工品まで含めた複数の品種をうまく組み合わせ、販路を拡大していくことについての検討が必要な時期にきており、生産部会と関係機関が一体となって、品質向上や販路拡大に向けた取組みを進めることがますます重要となっている。

(参考文献)

「宮崎県総合農業試験場百年史」宮崎県総合農業試験場百年史編集実行委員会1999.5.14宮崎県総合農業試験場「日本甘藷栽培史」中馬克己2002.03.20 初版 高城書房

